

## 「我が心のふるさと ～修学旅行前夜編②～」

校長 江口 満



【前号からの続き】龍安寺の石庭の裏に回ると、茶室に入る前に手や口を清めるための手水を張っておく手水鉢があり、徳川光圀の寄進と伝えられている。水を溜めておくための中央の四角い穴が「口」の文字を表し、その「口」の文字を、「五・隼・疋・矢」という4文字が囲む。「五・隼・疋・矢」と「口」を「へん」や「つくり」として合わせて読むと「吾唯足知」（われ、ただ足るを知る）になる。この「吾唯足知」は、「足ることを知るものは貧しいといえども富めり、足るを知らないものは、富めりといえども貧し」という禅の

教えである。「石庭の石が同時には14個しか見えないように石を配置してあるのは、人は完全にはなれない。足りないことに満足せよ。」「15個ある石庭の石を14個見ること

で満足するように、人生がすべて満たされなくても、今生きていることに感謝しなさい。」ということだと説かれている。龍安寺を初めて訪れたのは、大学四年の1月だった。卒業を間近にひかえていた当時の私は、広島市に下宿し、4月からは北九州市での教員生活が待っていた。広島は、その日は朝から大雪だった。友と下宿から新雪を踏みしめながら広島



駅まで歩き、始発の新幹線に飛び乗った。龍安寺へ通じるきぬかけの道、町並み、嵐電、そして龍安寺の石庭で既視感にとらわれた。懐かしさをも感じた。それ以来、人生の節目には、必ず、龍安寺を訪れるようになった。娘は、中学校の修学旅行で京都が好きになった。高校の合格祝いに祖母と

京都へ旅行に行った。娘は、大学進学のと時期、「京都の大学に進みたい。」と打ち明け、龍安寺そばの妻が普通った大学へ進んだ。

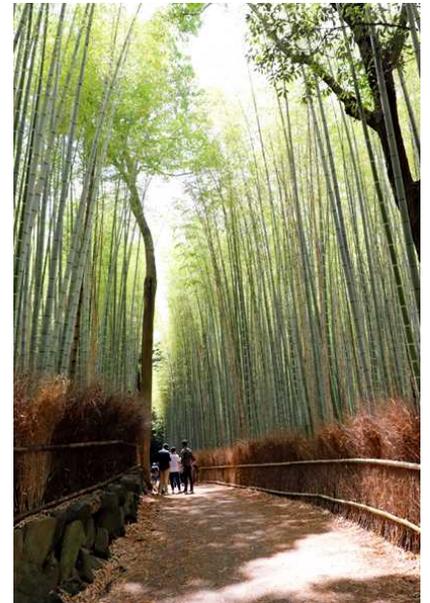
古都京都や奈良の地には、初めて訪れた場所であっても、懐かしさを感じさせてくれる風景がある。そして、その風景への思いが、再びその地に、人の足を向けさせる。京都や奈良の地には、私たちの心のふるさとを感じさせてくれる何かがあるような気がするのだ。三年生の皆さんと3日間、京都や奈良の時間と空間を共有する。京都や奈良の懐かしい風景は、私たちが求めようとする答えを与えてくれない。しかし、優しさに包まれ、自分を素直に見つめることができるこの地が、自分自身が出そうとした答えをそっとささやいてくれるかもしれない。

本校創立49年目「集大成」の年、私は三年生の皆さんとそんな旅をしたい。

【右】修学旅行2日目、京都・嵐山へ。その中でも渡月橋と並んで人気の写真スポットが、「竹林の小径」である。ここは壮大な竹林が楽しめる。昼食後、私はこの「竹林の小径」の奥で、カメラを携え三年生に皆さんの到着を待っている。



新幹線で「京都駅」が近づいてくると、最初に目に飛び込んでくるのが京都のシンボル「東寺の五重塔」だ。高さは約55メートル、木造建築物としては、日本一の高さを誇る。今回の修学旅行では、最終日、京都駅から我々を見送ってくれるはずだ。





5月19日(金)~21日(日)の二泊三日、玄海青年の家で行った「一年ふれあい合宿」が無事終了し、今年も多くの「感動の卵」が生まれました。一年の皆さんの作文を添えたふれあい合宿記の発行は、三年修学旅行明けになります。今しばらくお待ちください。ふれあい合宿の写真集は、4階に展示しております。学校へお越しの際、ご覧いただければ幸いです。

【左】2日目ウォークラリーの昼食時、岩屋海岸にて

【下】6月4日(日)から出発する修学旅行に向け、団体訓練をする三年生の皆さん



小倉駅から新幹線に乗車する方法を確認する三年生



【左】点呼の手順を確認後、報告する三年生



写真隊形を確認する三年生



素早く乗車する三年生



学級写真の隊形に並ぶ三年生



気分はすでに奈良・京都へ。ジャガイモの撮影練習？



京都駅も一発でクリアする三年生



学級写真隊形でのポーズも練習

